

さあ、私が今あなたにしてほしいことを記そう。礼拝に集まった時には、各々、全ての
人にとって役立つものを準備しなさい。つまり、詩編を歌うこと、教えを説くこと、物語
を宣べ伝えること、祈りを導くこと、洞察力を養うことを、それぞれ備えて集まることに
しなさい。

——コリントの信徒への手紙（一） 14章26節

ルカが伝えた「良い知らせ」

——ルカ伝福音書 訳述——

川上直哉

多くの人々が、すでに整理して物語っております通り、あの出来事は、確かに私たちの間
で起こったのです。それを語ろうとするものの中には、褒められたものばかりでもありませ
んでした。それで、テオフィロ（神を敬愛する人）閣下、ここに私が一筆啓上申し上げまし
た。つまり、最初から全てを目撃した人々・この出来事を伝える御言葉の奉仕者が、私たち
にきちんと伝えてくれた事柄があるのです。それで私は、そのことを、最初から・全て・詳
しく・順序よく知っておりますので、その通りお伝えしたほうがよろしかろうと考え、閣下
にこの手紙を認（したた）め、ご高覧に与（あずか）ろうと願ったことでした。そのように
して、閣下が学んでくださいました事柄について、一層、確かに知っていただけますように
と、その様に願っております次第です。

ヘロデがユダヤの王であった時代のお話です。一人の祭司がいました。名前をザカリアと
いいました。アビヤの組の祭司でした。アロンの家系、つまり、祭司の一族の女性を妻にし
ていました。その妻の名は、エリサベツといいました。夫婦ともに「神の前に正しい人」で
した。「主」と呼ばれる聖書の神様の掟と法を守って、責められるところのない夫婦でした。
エリサベツは「石女」と呼ばれていました。これで「うまづめ」と読みます。「石のように

固い女＝産めない女」という意味なのです。そんなわけで、二人には子どもがありませんでした。「祭司の一族」の家系を守ることができない。そんな日々を積み重ねて、二人はもう、ずいぶん年を取ってしまっていました。

日本の天皇と同じく、国家鎮守のために、祭司には「お勤め」があります。ユダヤの国でも、それは同じでした。ただ、日本の天皇は、少なくとも明治以来、「一人の人」にその役を担わせていますが、このころのユダヤでは、それは輪番となっていました。「祭司の家系」の者たち共同で、その大役を担ったのです。その「お勤め」の番が、ザカリアに回ってきた時のことです。ひとり、神殿の一番奥に入り、神様の前に出て、祭司の香を炊く係が、くじで決められる。それが「お勤め」を担当する祭司たちの習わしでした。この時、そのくじはザカリアを指名しました。ザカリアは神殿の一番奥に、一人で入っていきました。ザカリアが一人で「香を炊く儀式」を行っている間、神殿にいた大勢の人々は皆、神殿の中の外側の部分に集まって祈っていました。その時、一人の天使が、聖書の神「主」から遣わされ、ザカリアの前に現れたのです。ザカリアが香を炊いていた祭壇の右に、天使は立ちました。大事な儀式を行っていたザカリアは、びっくりしながら、天使を見つめます。その心は恐れで満たされていました。

天使はザカリアに言いました。

「恐れるな。ザカリアよ。

あなたの祈りが聞かれたのだから。

あなたの妻 エリサベツは身ごもり

あなたのために、息子を生むぞ。

その息子には ヨハネと名付けよ。

その子はあなたにとっての喜びの源

あなたは歓喜に満たされる。

多くの人が その誕生を 喜び祝う ことになる。

聖書の神「主」の御前において

彼は偉大なものとなる。

ワインと無縁の生活を送り、

シケラ（当時のお酒）は彼の口に入らない。

アルコールが人を満たす そのように

聖なる霊が 彼を満たす。

母の胎にいた その時から

実に彼は 聖なる霊に 満たされていた。

イスラエルの息子の 多くの者を 彼は連れて帰ってくる。

離れて久しい 聖書の神「主」の すぐそばへ。
彼らの神の御許（みもと）へと。

旧約聖書に描かれた あの英雄エリヤを 思い出してみよ。
あのエリヤを満たした霊が、
あなたの息子に注がれて
エリヤと同じ 力が満ちる。
そうしてあなたの息子は先立って
“あの方”の先触れとなるだろう。

預言者マラキが語った通り
あなたの息子は先触れとなり
「父たちの心を子たちに向けさせる」。
聞き分けのない人々が 正しい人の智慧に聞くよう 思いを変える。

そのようにして あなたの息子は
聖書の神「主」のために 人々を整え 備えをさせる。」

ザカリアは天使に言いました。「どうして、私にこんなことが理解できるでしょう。私は何とも、年を取りすぎたのです。私の妻もまた、もう、ずいぶん年齢が進んでしまいました。」
すると天使は答えて彼に言いました。

「我こそはガブリエル。
神の前に立つ者だ。
あなたに語る 言葉を携えやってきた。
喜び溢れるこの言葉 まさしくこれこそ福音を
まさにあなたに 届けに来たのだ。

見よ、あなたは押し黙る。
あなたは口が 利けなくなるのだ。
この素晴らしい出来事が 確かに起こる その日まで。
喜び溢れるこの福音に あなたは納得しなかった。
私の言葉を信じなかった。
私の言葉はそのうちに 時が満ちたその時に
確かに実現するだろう。その時が満ちる、それまでは、
見よ、あなたは押し黙る。」

神殿の中の外側の部分で祈っていた人々は、ザカリアがいつまでも中心部から出てこない
ので、「何があったのか」と心配しました。ザカリアは出てきましたが、待っていた人々に
何も語ることはできません。人々は「神殿の奥で、何か幻を見たのだ」と理解しました。ザ
カリアは身振り手振りで何かを伝えるばかりで、口ではまったく何も語ることができず、押
し黙っていたのです。

そして、ザカリアの「お勤め」の日々は終わりました。ザカリアは家へ戻りました。

それからしばらくして後、ザカリアの妻であるエリサベツは身ごもりました。五か月の間、
人前から離れたエリサベツは、こう歌いました。

「この私（わたくし）に 聖書の神は
この日々の間 ずっと変わらず
御目を注いでくださいました。
人々の間に 色濃くあった
私の恥を 取り去られたのです。」

そして妊娠6か月目の時のことです。天使ガブリエルは、神に遣わされ、ガリラヤにある都
市にやってきました。その都市の名はナザレといいました（皆さんの中には、ナザレは都市
ではない、と、ご異論をお持ちの方も、おられましょう。でも、とにかく、私はそう聞いた
のです。冒頭に「最初から・全て・詳しく・順序よく知っております」と申し上げた私とし
ては、聞いたまま、そう申し上げる次第です）。ヨセフという結婚前のある女性の所に、ガ
ブリエルはやってきました。この女性は婚約中で、相手はヨセフといい、「ダビデの家系」
の人でした。名家の生まれですが、今は没落して、家名だけを誇る一族でした。その名家の
ヨセフと婚約していた女性の名前はマリアムと言いました（皆さんは「マリア」という名前
でお覚えかもしれませんが、私はきちんとギリシア語で記します。マリアム、でございます）。

ガブリエルは彼女の所に入り込みました（皆様、どうぞ、ギリシアの由緒ある神話の情景
を、ここで豊かに思い起こしてくださいませ）。そしてガブリエルは歌います。

「幸いあれ！恵みを受けた方。
聖書の神『主』は あなたと共におられます。」

この挨拶にびっくりしたマリアムは、これはいったいどうしたことかと、思いをめぐらせま
した。天使はマリアに言いました。

「恐れるな。マリウム。
あなたは神の 恵みを受けた。
神の御許（みもと）に あった み恵みを。

見よ、あなたは身ごもる。
そして息子を生み落とす。
その息子には イエスと名前を付けなさい。
その息子こそ 偉大な人に 育ち行く。
至高の方の 息子と呼ばれる。
聖書の神『主』は この息子のために
『ダビデの玉座』を用意する。
その父祖の 玉座を彼は 手に入れる。
父祖の土地・ヤコブの土地を
代々に統らす（しらす）は 彼である。
その統治はとこしえに 決して終わることはない！」



マリウムは天使に言いました。

「それはいったい、どのように、
私の身の上（え）に 起こりましょう。
私はいまだ 男の人を 知らないのです。」

天使は答えて言いました。

「聖なる霊が あなたに臨む。
至高の力が あなたを包む。
それゆえにまた
生れ出（で）る子も 聖なる存在。
神の子どもと 呼ばれるだろう。」

実に見よ
あなたの親戚エリサベツを。
彼女も同じく 子を宿した。
年は取っていたのだけれど



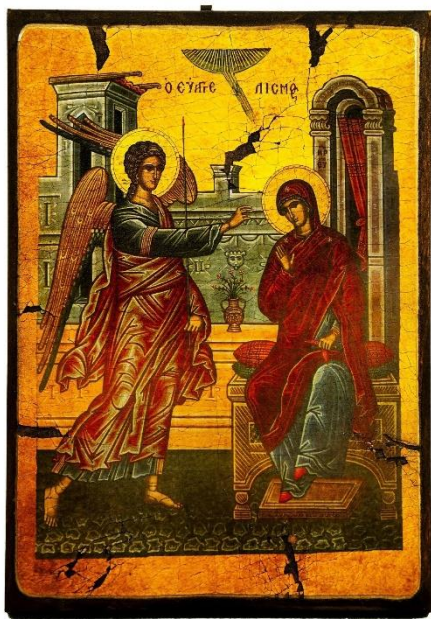
今は六月（むつき）の身重の身。
その身は確かに 『石女（うまずめ）』と
皆に呼ばれて 苦しんでいたのに。

神にできないことはない。」

マリアムは言いました。
「御覧なさい、
ここにいるのは
主の婢（はしため）。
あなたが語った事柄が
この身の上に 確かにそのまま なりますように」



すると、天使は彼女を離れて行きました。



天使の言葉を遮（さえぎ）って、ザカリアは言葉を失いました。天使の言葉を受け取って、マリアムも危険になりました。この当時、未婚の女性の妊娠は、「不義密通」あるいは「不倫」と呼ばれ、場合によっては死刑となります。まして、マリアムは「名家」に嫁ぐ身です。名前だけを頼りに生きる一族は、その名前の汚れを恐れます。誰かに匿（かくま）ってもら

わなければ。名誉殺人の危機が迫るのです。

数日のうちに、自分の体の変化に気づいたマリウムは、急いで旅立ちました。おなかの子どもを守らなければなりません。低地にあるガリラヤの都市ナザレを出て、高地にある「ユダの町」へと進みます。そこには首都エルサレムがあり、そこには親戚エリサベツがいます。彼女だったら、守ってくれるかもしれない。

つわりの苦しみをこらえつつ、とにかくエリサベツの住む家・ザカリアの家へ、マリウムはたどり着きました。「祭司の家」です。この時代、世界中どこでも、祭司は最高権力者の一角に位置づけられています。その家に、厄介（やっかい）ごとが、持ち込まれました。頼りはひとつ。妊娠六か月の、身重のエリサベツです。彼女が理解してくれるなら、ようやく何か、可能性が拓けます。「恐れるな」との天使の言葉が、マリウムの胸に響きます。彼女はエリサベツに挨拶をしました。

その挨拶の言葉がエリサベツに届いたとき、です。なんと、エリサベツの胎の子が、おなかの中で飛び跳ねました。そしてエリサベツは霊に満たされて、大きな声で言いました。

「祝された人。すべての女性は あなたをうらやむ。

その祝福は あなたの胎の実に及ぶ。

こんなにも 素晴らしいことが どうして起こるか。

私の神・主の母上が 私の許（もと）に お越しになった。

御覧なさい。

あなたの声を 聞いたとき

私の耳に 挨拶が響き

私の胎で 赤子が躍った。

祝福された あなたは確かに

聖書の神・主の御声を聞いて

それがそのまま 実現すると

そう信じて旅立ち ここまで来られた。

そうした人こそ 祝された方！」

するとマリウムはこう言いました。

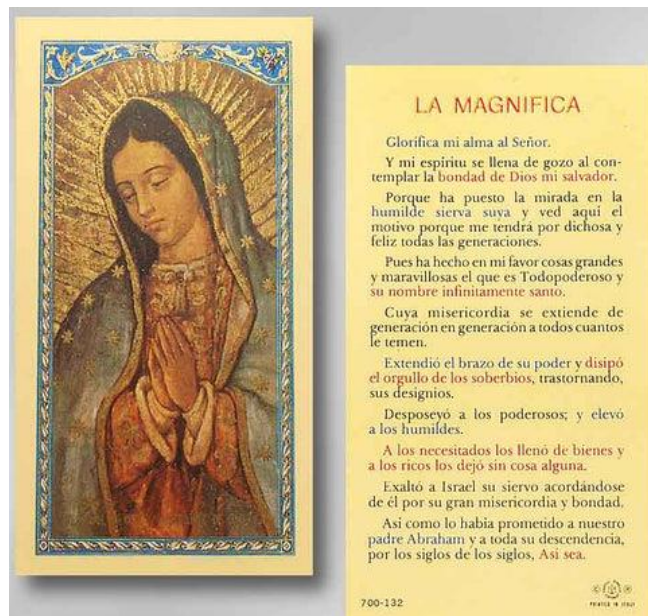
「私の魂は 聖書の神・主の力を知って

その偉大なことを 大きな声で語ります。

私の霊は 私を救う神様に触れ 喜び踊り はしゃぎます。

確かに聖書の神・主は私を顧みて

この婢（はしため）の 引くみにまでも 届かれました。



御覧なさい。

今より後、代々にわたって 皆が私を祝します。

力ある方 その大いなること そのことが

確かに私に示されました。

その方は「聖なる方」と 呼ばれている。

その方は 憐み深い お方です。

その憐みは代々にわたって その方を恐れる人に及びます。

聖書の神・主は その御手で その御力を 示される。

心の思いに高ぶるものは

聖書の神・主の御手によって散らされる。

権力者たちは その玉座から引きずり降ろされ

低く卑屈に生きる人々を 主は引き上げて下さるのです。

飢えて苦しむ人々を 主は良いもので満腹させて

富んでケチな人々を 手ぶらのままで追い払われます。

主はその僕（しもべ）イスラエルを助けてくださり

その憐れみを 思い起してくださいました。

私たちの父祖が聞いた その通り

アブラハムとその子孫に、とこしえに

その憐みは 及ぶのです。

マリウムは三か月、エリサベツの所に留まりました。つまり、エリサベツは、月が満ちる直前まで、マリアを自分の手で匿（かくま）ったのでした。そして身重のマリウムは、無事に家に帰ったのでした。

